

み雪を仰いで月夜を思はう。それから……………新潟。

都會はいやだ。越後の引緊つた肉の美人も見たくはない、肉の力に氣をさ壓れるやうな女は見たくはない。では出羽だ、出羽の旅に出かけるのだ。

汽車が狂人のやうになつて駛る、福島を過ぎると山容がすつかり變つて、空氣がドス黒くなつてくる。それから曉あかつき闇のなかに山谿の雪をみて走る、雪の上を一抹紫いろの煙が漂ふてゐるのをみて、北へ北へと走つて行く。——それから……………山形……………秋田……………弘前……………青森。

パノラマのやうな北國の風物は、真田の目に、電光の瞬間に照し出されたやうに、パツ／＼と見えた。彼のこゝろは鋭く尖つて、それから夫れへと火箭のやうに飛んでいつた。

ふウ——と吐息して僅のゆとりを得た。其ときにお妻の前垂と自分の頭の髪とが擦合つて、快い音がしたのを聞いた。そして一時の安息を得たやうな氣持になつて心を休めてゐると、次第にお妻の膝の温味が頭腦に傳はつて、尖つてゐる神経がとろ／＼とまどろむやうな快感を覺えた。

## 三十一

鋭い神経が波うつてゐる頭も、嵐のやうに騒いでゐる胸も、次第に風で來た。

真田は静かに閉ぢてゐた目をみひらいた。お妻の大きな目や、白く圓



い頸の邊りが直ぐ目につく、濃い眉はまたなく媚を添へて、脱けあがつた頬が隠れるだけに若々しう見えた。

『気分はどう?』長い瞼毛は亂れてゐない、濃やかな表情は、彼のころまで蕩かすに充分であつた。

彼は黙つて目だけ働かせてゐた。昂奮した時と違つて、象のやうな、夢をみてゐるやうな、それは柔しい目であつた。ふたりは上と下とで互に目を見合つてゐる。目と鼻を見詰てゐると、顔の輪廓がぼんやりとして、目だけが生きてくる。开して赤い唇が燐のやうに燃えてゐるのが見えた。

ぼんやりみえてゐたお妻の顔が、はつきりとして來た。鼻の小さな穴

がみえる、それから毛深い女に有勝な髭らしいのが見ゆる。

『髭があるせ。』

『近頃ちつとも剃らないもんだから、ほんたうにこんなに……。』自分で口のあたりを摩擦してゐた。

『俺があたつてやる、剃刀を出せ。』彼はむツくと起上つた。

『いゝわよ、あたしがあたるから。』

『俺にあたらせる、滅多にこんなことはないぞ。』

それから彼は西洋剃刀を取出してお妻の頬に當てた。剃刀は毛に觸るとピツピツと反撥する音を立てた。薄い刃は銀箔のやうにピラ／＼して、白い皮膚の上を這つた。輪廓の柔かな顔にスウ／＼と剃刀が流れるやう



に操られる。――

彼は口の邊りを剃つてから、次第に生際に及んだ、生際から眉に移ると彼の粗放なこゝろは、犇とすくんで、毛の一本々にまで心を奪はれた。濃い眉が次第にはつきりとしてきて、毛の剃落された痕の僅かが、幾らか青味を帯びて、繪草紙に見るやうな眉の色彩いろどりが出来あがる。彼はふつくらした女の肉を軽く押へながら、それに刃物を當てゝゐる間、又とない快さを感じた。

彼は強てお妻の襟元を剃り始めた。剃刀の光がピカ／＼と電のやうに閃いて、白い肌の上を走ることが嬉しかつた。襟元から果ては咽喉にまで及んだ。咽喉首は人並外れて美しくしう見えた、肌のキメは殆ど密な極

致をみせてゐるやうに滑々してゐる。彼は刃をこゝに當てゝ限りない觸覺の快さを貪つてゐたがピカリと光つて、刃物のキツと鳴る音がした一刹那、はッと慄へて手がすくんで了つた。

心臓は俄に激動した、全身の血は冷渡つて「今若し此咽喉を切つてゐたら？」といふ恐怖が一ぱい満ち充ちた。目の前にピカ／＼と刃が光る。白い絹のやうな肌がみゆる。その下を血が流れてゐる。プツリと切つたら、細かい血管からあかア、美しい血がたら／＼と流れ出さうに思はれる。切つて見たい、此銀箔のやうな薄い刃をピカリと閃かしてサツと切つてみたい、美しい血がみたい、あゝいつそモウふつりと斬り込んで、切口から迸り出る血を、どツク／＼と腹一ぱい吞まうか！。



『お妻ッ、心中しやう、こゝをサツと斬つて!』

『冗談でせう、あたし心中の話なんか、だいきらい。』——お妻は剃刀に咽喉を預けて、にこやかに笑つてゐる。

彼の熱し切つてゐたこゝろは、次第に和いできた。刃を咽喉に當てられて、笑つてゐるお妻の顔をみると、無慘なことも言へなくなつた。それどころか、身も心も自分の前へ捧げて、自分の懐に安らかに眠つてゐるやうに思はれた。

『馬鹿者! 鳩のやうな女の咽喉を切るなんて、何をたわけてゐるんだ。それが貴様の病氣だッ。醒めろ、冷やかになれッ。』——斯ういふ心が熱したこゝろを怒りつけた。で、こゝろは次第に穩かになつた。夕立に消ゆる野火のやうに。

『ありがたう、ほんたうに上手ね、ちツとも知らなかつた。』お妻は手拭で痕を拭ひながら禮を述べた。

『俺は何でも器用だよ、之で昔は押繪でもやつたものだ。』真田は剃刀を磨きあげて、窓際のあかりに、すかして打眺めた。

剃刀は少しの斑点もなかつた。新らしい匂ひが見えて氣がすがしくした。彼は青年畫家の正木から、形見に貰つた剃刀のことを思ひ出した。

### 三十二

その短刀は、正木の家に傳はる無銘のものであつた。



正木が大阪に立つ前のこと、頻りに懊惱して暗闇の中を躍り狂つてゐた。真田は正木の様子を見て今にも發狂しさうに思つた。發狂しないまでも自殺するか、やさしいところで隱遁ぐらゐはするだらうと思つてゐた。

それで、正木の話が熱してくると、彼は頭から冷罵を浴びせかけた。その時は不思議に自分の頭腦が冷やかになつて、正木の細かな煩惱のころまで感得された。で、彼は力めて正木の熱を冷すことを言つた。

その頃短刀を貰つたのだ。その日正木が青い顔をして鬱ぎ込んでゐた。

『僕は近頃死にたくなつた。』溜息を吐いては、生なこんな事を言つて

ゐた。前夜洲崎の海岸を歩いて、對岸の京橋日本橋の灯をみた時、妙に無常を感じたと言つてゐた。真田は手函の中に短刀のあるのを此時見出した。

『これは君に贈らう、僕の祖父から東京に出る時に貰つたのだ。いろいろの訓戒も此刀に添へてあつたが、今から思へば其訓戒といふものが、つまらぬものだ、重き荷を負ふて遠き道を行くが如し、急ぐべからずつてなもんだ。が、其訓戒といふものも、僕の今の煩悶を救ふ力は更に備へてゐない。』こんなことを言つてゐた。

短刀の鞘には正木家の定紋が盛つてあつた。古刀には違ひないが、さしたる業物とは言へない。及はところごとくこぼれてゐるが、すがめ見る



と流石に匂ひは露が垂るやうであつた。

『刀をみてゐると気分がすつかり變つて了ふね。』真田は斯う言つたが、正木は何とも答へなかつた。暫らくして

『僕は刀をみてると死にたくなるッ。』唸るやうに拳を振まはした。

『まア預つて置かう。』斯う言つて彼は持つて歸つた。

懷中に短刀を呑んで電車に乗つてゐるのが痛快だつた。紙入や懷爐や手拭などで、懷中がふくれてゐるのと違つて冷やかな氷の棒を呑んでゐるやうな感じがした。今にも鞘走りさうな氣がした。

酒を飲みながら刀を抜いて振廻してみた。お妻は慄へ上つて袖で目を蔽うてゐた。そして狂人のやうに

『早く收つて頂戴、早く〜。』と叫んだ。

それ以來、短刀は前の兄さんの家の簞笥のなかに收められてゐる。——それを彼は思ひ出した。

短刀の晃々とした光をみながら、酒氣を吹いて、胸の中に一ぱいになつてゐる悲しみも喜びも悶えも、みんな吐いて了つたら、頭腦が冷ツてくなくなつて、總ての事がテキハキと判断されさうに思はれた。總てといふよりも、差當りお妻との關係をドウしたらよいかといふ考へが、纏まりさうに思へた。

『お妻、前の家にいつて刀を持つて來ないか、一寸いるから。』  
お妻の顔色はサツと變つた。



『いやよ、刀なんか、どうするの。』

これだけ言つて口を閉ぢて了つた。そして沈み切つてゐる有様が、いたくしうて彼は見るに堪へなかつた。

ほんの今さきまで、剃刀に咽喉を預けてにこ／＼してゐたものが、短刀のことを聞いて、見違へる程恐れを爲して、目には怨めしい色までが漂ふてゐる。——彼は自分の懐に熟睡してゐるお妻が、悪夢に襲はれて、ガバと跳起きてブル／＼顛へてゐるやうに思つた。

するうちに彼のこゝろからは、「冷やかな判断」といふ事も消えて了つて、たゞ風に驚き夢に醒むるお妻の便りなさうな心を、いぢらしく思ふ憐れみのこゝろばかりになつて了つた。

彼は机に倚つて手紙を書き出した。それは先輩に送る長文のものであつた。

此短刀を謹んで贈ります。

これは私の友人である、或る青年畫家から譲られたもので、此友は此短刀を持つてゐる事が恐ろしいと云つて私に贈つたのです。私も亦此刀を持つてゐることが恐ろしいので、貴兄に呈します。貴兄は情の人ではあるが理性の勝つた方だと信じてゐますので、情熱に富んでゐる青年の血を湧かせて、災を爲す此業物をお預けするのです。

青年畫家のことは多く申しません。うす／＼は御承知のことゝ思ひます。それよりも、これを機會として私のことを少し申し上げたい、御



面倒でも聞いて頂きたい。なせかなればあなたの申さるゝ所謂「あんな女」のことに關聯してゐること、開して御意見して下さい。其後の結果を報告するのと同じ意味であるからであります。

女は全く「あんな女」です。私も「あんな女」をと思ひ乍ら、相手になつてゐましたが、今日では「あんな女」だから猶且離れられなくなりました。これが十七八の赤襟盛りと、廿歳位の青年とが、一寸様子がいゝとか、さつぱりしてゐるとか、そんな事で戀し合つたのと違つて、始めのうちは「あんな女」がと思ひ乍ら次第に深くなつたのですから、まア申せば腐れ縁とでもいふのでせう。相惚、見惚、氣惚など、其道の通人は戀の年齢と、戀の時間とを區別してゐますが、私どもの戀は

強て求むれば、氣惚の部類に入りませうか？。然しそれにしても何だか説明が足りない氣がします。單に惚れたと申すのも「戀した」といふ單純な意味とは違ひまして、戀以外に大きな生活上の問題と夫れと何と言現はしてよいか……言葉に窮しましたが、心靈上——ちと大袈

娑ですが——の苦痛が伴つてゐるのでした。おのろけではありません。

先達も御言葉に對して思つたまゝを飾り氣なく申し上げましたが、其後どうしても別れるやうな機會がありません。と申してわざと機會を作らうといふ心も起りません。況んや「あんな女」と別れるれば身が固まるとか、出世ができるとか、そんな幸福らしい事は夢にも思はないで、



ますます關係が深くなつて參ります。

が、女は近頃私の精神状態に波瀾らんの起るのを非常に恐れてゐるやうです。そして自分の身の行末について、非常に煩惱はんのうしてゐる様子があります。ありと見えます。私はこの恐怖の状態をみてゐるのが、また嬉しいものゝ一つですが、今日けふなんかは此短刀を見せたら、慄しよへあがつて了しまひました。其時私は「あんな女」が、裏の植木屋の堀井戸で水を汲む時に、恐ろしくて釣瓶つひんを持つた手が顫ふるへたと申した事を思ひ出しました。そして毎日々々身の落おちつきどころが定きまらないやうに、をどくしてゐる様子が、一入ひとしほ不憫びんに思はれてきまして此短刀を私の身邊しんぺんから離はなさうと決心したのであります。

私が此短刀を恐ろしいと申すのは、私は此刀の光をみると快感を覺ゆるが、既に其時には平靜な精神状態でないといふ事と、「あんな女」が短刀の利鋭と私の熱狂を恐れるといふ二つの意味があるのです。

「あんな女」の恐るゝ短刀なら、猶なほ身みにつけてゐたら、女も自然に恐れて別れるやうになりはしないかといふ御言葉もありませうが、夫れは斷じて致しません。私は別れるにしても、自然に別れたいので、無理に機會を作りたくはないのです。或は二人ふたりの心がフテリと變つて今の今別れるか、或は此儘互に不安の關係を、千年も萬年もつゞけて居をるか判わからないのです。

兎に角謹んで此短刀を贈ります。迷惑でも納めて戴きたい。請取つて



下さつたら、捨るなりと小刀代りにお使いにならうと御勝手です。随分押つけがましい話ですが、貴兄だから我まゝを申すのです。然し此短刀の晃々たる光に、短刀の持主の變遷と時代の思想といふやうな事を思はれたら、屹度深い感興を催ふさるゝ事と信じます。青年畫家は唯今大阪でぶら／＼遊んでゐるとの事です。相變らず煩悶道樂をやつてゐませう。

此短刀贈呈の使者は「あんな女」です。これも貴兄の興味を惹くことゝ思ひます。私は悪戯でも何でもない、「あんな女」が恐れてゐる短刀を抱かせて、此手紙と夫れと道しるべの地圖と番地の書いたのを持たせてやるのです。そして女が慄へながら貴兄を訪るゝ其心持を味はつてみたいと思ひます。

又、何れ拜眉の上御意見を伺ふ折もありませう。

## 三十三

真田は書き了つて、前の家へ飛んでいつた。兄さんは佛像の磨きを弟子にさせ乍ら、自分は獅子の置物を刻んでゐた。

『兄さん、短刀を出して下さい。さあ。』  
兄さんは不審さうに、箆笥から大和錦の袋に包んだ短刀を取出して渡した。

『どうするんですか。』



『なアに、友人にやるんです。』

お妻は案の如く短刀を恐れて、見まい／＼と力めて居た。

『お妻、これから本郷までいつて呉れ、短刀を持つて！。』

『いやだわ、そんなもの。』

『何でもゆけ、さうすると、これからお前も安心して寝られるではないか。』

『……………。』

『黙つて行け。何ともいふな、この手紙を添へて出したらいゝんだから。』

お妻は漸う決心した。

『ぢやアいつて来てよ。だけどわたし、あつちにいつても何とも言はなかつてよ。』

『うむ、それだけでいゝ。』

それからお妻は仕度にかゝつた。胸の裡では、自分が短刀を持つてゆくといふ事が、どうして夫れだけ大切な事かしらと思ひ乍ら化粧をしてゐた。が、此使ひは何となく真田の爲に是非しなければならぬ、重い仕事のやうに思はれた。それとモーツは成るべく真田の側から刃物を取除けやうといふ希望もあつた。

『なんだかイヤに重いものだわね。』お妻は短刀を風呂敷に包みながら、恐ろしいものを取扱ふやうにびく／＼してゐた。



『うつてきてよ。かへるまで御飯は我慢していらつしやう。』

真田が納得した様子を見て雪駄をはいた。

『何だか變な氣持よ。あなた、途中で抜けるやうな事はなくつて?。』

『大丈夫、急いでゆけ。』

お妻はコートの袖で、風呂敷包みを隠して歩き出した。砂交りの寒い風がさつと吹いて石油罐を鳴らす。

『お、寒さー。』

お妻は大きな目を細くした。横顔に鬢の毛が亂れかゝる。真田は座敷の入口から、お妻の出てゆく姿をみてゐた。

後姿は流石に艶で粹であつた。昔の名残が足の運びにみえてゐる。

平常ならば「寒けりやクリームでもうんと塗つてゆけ、皺が殖えるせ」と冗談の一つもいふのだが、今日は見送つてゐる時に、胸が潰れて口を利くこともできなかつた。

座蒲團の上に歸つたが、お妻の後姿は、まぎ／＼と目に生きてゐる。お妻が顔色を失つて恐れる短刀を、あの柔らかい肌につけて、びく／＼し乍ら自分を「あんな女」と嘲る人のところへ、何の邪氣もなしに、たゞ真田の命のまに／＼うつら／＼と夢のやうにゆく。——その氣分に、その後姿に詩がある、人生の悲しい詩がある、この心持をしみ／＼味はつてみやう。——斯う思つたが、たゞ短刀、恐怖、手紙、お妻、先輩、こんな切々な題目だけを考へても、胸が暗くなつて了つて、其題目と題



目とを繋ぎ合はせたり、色彩をつけたり、氣分を味はつたりする餘裕が生れなくなつた。題目のそれが既に悲痛だ、それ以上深く思ひ耽るに堪へなかつた。

彼は氣ぬけがしたやうであつた。

『お妻と自分との事は何も考へまい。成行のまゝに任せやう。此上深く考へたり推察したりするのは、全く恐ろしいことだ。』

彼は自分でつゝかずに、此まゝそつとして置くといふ事に、今、ほんの今は興味を惹起した。

『福袋を開くやうな氣持だ。ガラクタが出るか、寶が出るか判らない、そつとして置かう。』——斯ういふ氣持が嬉しう。

『西洋の探偵物語の結末でみたやうに、一つの檻に猛虎がある、一つの檻に小羊がある。どつちの入口を開いたら虎が出るか羊が出るか夫れがわからない。羊が出ると嬉しいが、虎が出ると命が失くなる、此儘そつとして置かう。』——斯ういふ境遇に擬して自分をみるのが嬉しかつた。

彼はやつぱり酒が呑みたくなつた。それから二時間も経つたが、お妻は歸つてこない。で、ひとりで燂をして飲んでゐた。空つ風は窓の戸をガタ／＼鳴らした。

それから時間は随分経つた。が、お妻は歸つて来ない。待宵などいふ唄があるが、斯うなると焦れて、いやが上にも淋しくなつてくる。けれども彼はお妻が歸つて来ない——といふやうな不安は少しも感じな



つた。先方で手間どつてゐるか池の端に寄つてゐるのだらう、それ位に思つてゐる、お妻は自分をすツぱかして隠れるなんか、そんな際どひ事の出来る女ではない、いやでも自分を使つてゐなければならぬ女だと信じてゐる。で、焦れながらも飲んでゐた。

酔つた耳にも外の物音はよく聞きとれた。吹き荒ぶ風の中に貧民窟らしい雑音が交つてゐる。——するうちに車の轍の音が近づいて来た。その音は凍てた泥溝に響いて、一入淋しく聞かれた。

『歸つて来たな。今夜はうんと飲んでやらう。——やつぱり、をれの外に縫る者が無いんだ。縫れない——と言つたつて、知らずく俺のふところへ歸つてくるのだ。』

斯う思つて車の近づくのを待つてゐた。开して胸には押へ難ない力が色々の色に燃え熾つてゐた。 (完)





大正元年十月十六日印刷  
 大正元年十月十九日發行

現代文藝叢書  
 第十六編 (滿)  
 定價金貳拾五錢

著者	小野賢一郎
發行所	東京市日本橋區通四丁目五番地 和子
印刷所	東京市京橋區月町二十四番地 金子久太郎 三協印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地  
 春陽堂  
 電話本局五十一  
 按器口座 東京一六一七



現代文藝叢書目次

第一編	正宗白鳥	泥人形	(版七)
第二編	徳田秋聲	我子の家	(版八)
第三編	鈴木三重吉	女と赤い鳥	(版七)
第四編	水野葉舟	山上より	(版六)
第五編	後藤宙外	草あやめ	(版五)
第六編	野上白川	巢鴨の女	(版四)
第七編	泉鏡花	歌行燈	(版六)
第八編	生田長江	最近の小説家	(版五)
第九編	田山花袋	死の方へ	(版五)
第十編	小川未明	物言はぬ顔	(版四)
第十一編	兒玉花外	哀花熱花	(版三)
第十二編	小山内薫	霧	(版四)
第十三編	島村冬三	貝	(版三)
第十四編	笹川臨風	葉	(版三)
第十五編	森田草平	初	(版五)
第十六編	小野賢一郎	満	(刊新)
		戀	(版五)
		柳	(版三)
		殻	(版三)
		積	(版四)

現代文藝叢書世評一般

●泥人形 (二六新聞)

現代文藝叢書の第一篇として公にされた「泥人形」及「死後」の二篇を収めて居る、元來本叢書發行の計畫は獨逸のレクラム會社の文藝叢書のそれを踏襲したものでらしく、本の體裁からして其れに類似して居る、若し十年、二十年と續いて永遠に遺て貰へるならば至極結構な事だ。

世評一般

●泥人形 (創作)

現代文藝叢書の第一篇として發刊せられたものである。本年七月の早稻田文學にて好評を博した「泥人形」の外に「死後」の一短篇を加へ、二百頁を以て一部とした小形の氣持のいい本である。「泥人形」は守屋といふいつも安住する事の出來ない、ナイヒリスチツクな男が、家庭といふものでも持てば、少しは落ちつく事が出来るだらうかといふ氣まぐれ心い



ら、若い妻を娶り、しかも却て放蕩のなつかしさを覺えたといふやうな事を描いたものである。當時可成評判のいゝものであつたが自分にはさう大したものと感じる事は出来なかつた。それよりもどちらかと云へば「死後」の方に、より多く深い印象を受けた。あまり多くは發揮されないが、以前からあつた白鳥氏のある一面のかうした気分を自分になつかしく思ふ。

●我子の家 (中央公論)

(前略)秋聲氏の作品は此篇に限らず、總て滋味であつて、深く人生の一角を描破する所、何人の追思も許さぬのであるが、一體が滋味

がつて華やかな賑やかな所の少い所から、作品の價値に比して人氣の乏しいのは文壇の爲め深く措む所である。

●我子の家 (ホト、ギス)

春陽堂發行現代文藝叢書の第二編である。收めたる「我子の家」「祭」「新店」、以上三篇の小説、何れも著者が得意の材料より成るもので、シミな技巧、クスンだ筆致の間に、人生の薄暗い、シリ／＼と壓し迫つて来る、如何にもならぬ運命といふやうなもの響が、漂うてゐる。蓋し他の侵略を許さない境地を占むるものである。

●女と赤い鳥 (二六新聞)

著者は鏡花に似て居ると言はれて居る人であるが、然し鏡花とは大分行き方が違つて居るやうだ、殊に其の文章に至つては、全く別種のものと言つても好い唯だ女性には兩者互に共通な所があるかも知れぬが、然し其を以て直に著者を鏡花に類似せりと云ふは酷だ、ネオロマンチズムを標榜して居る著者、果して何の邊まで進み得るか、其れは疑問だが、兎に角本書の如きは日本に於ける其の派の代表的作品と言つても好いと思ふ、此の意味に於て本書の價値は認められる。

現代文藝叢書目次(其一)

- 第一編 泥 人 形(正宗白鳥)
- 第二編 我子の家(徳田秋聲)
- 第三編 女と赤い鳥(鈴木三重吉)
- 第四編 山上より(水野葉舟)
- 第五編 草あやめ(後藤宙外)
- 第六編 巢鴨の女(野上白川)
- 第七編 歌 行 燈(泉 鏡 花)



●女と赤い鳥 (帝國文學)

『女』は獨逸のロマンテイケルの作をでも讀むやうな氣がしてならなかつた。熱のある女が心の悶えを主にしてとらはれぬ男を配したものだ、女の心の一面は中々に躍動して現はれてゐる。それと西洋文學の影響が或る度までこなされて出て居るのは注意すべき點である。『赤い鳥』はしつとりとした筆致といふ點では前者よりも更に此作者の特長を現はしてゐる。事件の運びも前者よりすらくとして、筆が落着いてゐる。自分には此の方がなつかしく讀まれた。

●女と赤い鳥 (ホト、ギス)

現代文藝叢書の第三編として『女』と『赤い鳥』との二篇を集めたるもの、共に著者が最近の傑作である。殊に『女』は去る四月本誌臨時増刊『五人集』中の一異彩であつた事は讀者の記憶に新たなる所であらう。女性描寫に於ては他人の企及を許さざる獨得の手腕を有つてゐる著者は、この二作に於ても、女性をして主要なる役目を働かせてゐる。蓋しデリケートな筆致はデリケートな女性の情緒を活現せしむるに最も適切なるものである。現下文壇に於ける最も新らしき傾向の一面を窺ふに足るべき作品として、又た最も清新にして強烈な

る個性的色彩を表現する作品として、敢て之を讀書子に推舉したい。

●山上より (臺灣日日新聞)

好評ある現代文藝叢書第四篇なり筆に言い知れぬ優しみと暖かみある作者の山水に遊べる記憶を書いたもの『山上より』『沼畔より』『漁村にて』『密室』の四篇を収む旅行記の最も新味あるものなり。

●草あやめ (時事新報)

『草あやめ』は後藤宙外氏の著にして、現代文藝叢書の第五篇として發行せられたるもの、『壽筵の前後』『逆縁』、外十數篇の短篇小説を

集めたり。いづれも『新小説』あたりで一度讀みたるもの許りにて全然新らたに筆を下したりと思はるゝは一篇も見當らざれども、兎に角特色ある作家として當今の文壇に雄飛しつつある著者の作として、是れといふ傑作もなき代りに、書きなぐりの駄作なきが何よりも嬉しく感ぜらる。短篇多ければ、汽車の中や電車の中の讀物として適當なり。芽出度い『壽筵の前後』よりは、可哀想な『逆縁』の方面白く、讀者をしてホロリとせしむる處あり。

●草あやめ (徳島毎日新聞)

現代文藝叢書第五篇として後藤宙外氏の作、壽筵の前後、逆縁を始め、ふれ太鼓、努力、



雑祭、洪水、櫻の頃、湖畔より、浴容、寺まわり、祈禱者の十一篇を収めて有る、前の二篇は稍々長いが、後のは皆短篇である、何れも氏の一流の穩かな調子に書きこなしてあるのが嬉しい、新春の讀物として文壇を飾るべきものである、

●巢鴨の女 (二六新報)

「ミナ」「おらく」「干潮」の三篇を収めて居る第一に於てはミナと云ふ小犬の事を背景にして處女から女に成て行く乳屋の娘を描き、第二に於ては主人の家を逃げ出して自殺を企てたる少女を寫し、第三に於ては東京見物の客を迎へる家族及吉原の火事を材料にし居る、

第一、第二に於て著者の伎倆最も良く現はれ、其の作風の長所を窺ふ事が出来る、第三には描寫に稍々冗漫の箇所はあつたが、生活に瘦れたる地方人を最も明晰に寫し出して居る、蓋し何れも此作者の佳作であらう。

●巢鴨の女 (信濃毎日新聞)

ミナといふ犬を背景にして處女から女になつて行く牛屋の娘お杉さんの身の上を寫し、「ミナ」繼母に虐められすし屋の女將に酷使され、とても堪らないと逃出して自殺した娘を描いた「おらく」、東京見物を迎へる家族を材料とした「干潮」の三篇を輯む、現代文藝叢書第六篇にして描寫は白川氏獨特の精巧を極む、青年讀書子に薦むるを躊躇せず。

●巢鴨の女 (静岡民友新聞)

現代文藝叢書第六編として出づ野上白川の著なり内容はミナ、おらく、干潮の三編を集めたるものなり著者曰く巢鴨に七年住んだ私が觀察し考へた小説で處女から女になつた行く牛屋の娘、主人の家を逃げ出して自殺を企てた少女、東京見物の客を迎へる家族、飼犬の死吉原の火事、とが材料となつてると描寫は極めて落付いつ居る内に輕妙な處がある。

●最近の小説家 (中央新聞)

現代文藝叢書の第八編として出でたる者にて

第八編最近の小説家(生田長江)
第九編死の方へ(田山花袋)
第十編物言はぬ顔(小川未明)
第十一編哀花熱(兒玉花外)
第十二編霧積(小山内薫)
第十三編貝殼(島村苳三)
第十四編葉柳(笹川臨風)
第十五編初戀(森田草平)
第十六編溝(小野賢一郎)



「夏目漱石氏と森鷗外氏と」「田山花袋氏」「島崎藤村氏」「泉鏡花氏」「徳田秋聲氏」「眞山青果氏」の六篇の評論を収めたり、長江氏の議論に對しては世上兎角の評あれども其の思ふ所を直截に、何處迄も突込んで縦横に論じ去り論じ來る所、現代稀に見るの論客たり殊に漱石鷗外二氏を論ずる所等は到底他の企及を許さざるものあり、評論界の甚しく沈滞したる折柄此の書の出づる實に空谷の靄音と云ふべきなり

●最近の小説家

(大阪時事新報)

現代文藝叢書の第八篇として特に批評家たる

著者の夏目漱石、森鷗外、田山花袋、島崎藤村、泉鏡花、徳田秋聲、眞山青果の七大家論を蒐録したるものなるが各篇各其の人の創作を見るが如き快味を以て讀ましむるもの好文字と稱すべく標題最近の小説家はやがて文壇最近の評論集とも見るべし。

●最近の小説家 (萬朝報)

(前略)著者は元來洞徹の眼光と皮肉の文章とを有す断片的にしてしかも聯珠の如きこの評論は即ち一家の最も得意なる壇場に最も自然なる筆法を揮ひるものといふべく、美醜を辯じ、善惡を斷じて、鋒芒極めて精銳なるものあり漱石鷗外論の如きは未だ以て驚に足ら

ず、獨歩との對照は筆を起せる大なる田舎者花袋を始め、藤村、鏡花、青果に對する所論、何ぞ肯綮に當れるの甚しきや、評論界近來の珍

●死の方へ (東京時々新報)

「現代文藝叢書」の第九編として出でたるもの、「死の方へ」「幼きもの」の二篇を收めたり「死の方へ」は社會の落伍者として失意の淵に沈んだ中年の男子が息はしき肺結核の手に捉へられ、絶望の軀を冷たき病院の一室に投げ込まれ、日にく死の牢獄に進みゆく運路とさうして患者の心理状態と、併せて此患者と離れ難き關係に置かれたる親戚知己、

兄弟妻子の心理に立入て赤保々の解剖を試みたるものにして一節又一節、讀者をして生の執着より來る限なき恐怖と、死の運命に對する一種の戰慄を感じしむ「幼きもの」は著者の前著「蒲團」の後記とも見るべく愛に盲いたる若き男女の偶然の行爲によりて此世に生たる可憐なる小兒の短き一生を描きたるものにして、此若き父と母の戀の復活までは嘗て何かの雜誌にて女主人公それ自身の告白にて讀みたる事ありしと記憶す、本篇は田山氏の所謂師弟以上に此女主人公を愛し、若し道子の父にして、此世になかりせば、予は必ず世間の道德も最愛の妻子をも顧みず彼女と烈しき戀に落ちたるならんと自白せる其師匠の立場から



其愛人と女敵の間に生れたる愛の結晶——可憐の嬰兒に對する偽らざる心事を曝露せるもの、花袋氏が日頃主張する現實曝露に對する著者の大膽真摯なる態度により多く驚嘆したりといふ以外に、評者は多く言ふ處を知らざるものなり。

●死の方へ (心の花)

生涯不遇に終つた男の最後に肺病で入院する餘儀なくこれまで生活費にも世話をかけた弟それも僅な給料の中から病院の費用まで厄介になるといふのが非常に心苦しいといふ病外の苦しみ看護をする苦しさよりもその方を一倍苦にする其妻よく見舞つてよく世話をして

居る弟が大事の貯金に手がつくに至つてすまぬと思ひながら不治の人に貢ぐのはつまらぬと思ふ心の裡始めから同情のない弟の妻の心など世間有がちの事がらを抉つて描いたそれに幼きものゝ一篇を添へてある。

●死の方へ (廣岡中國)

現代文藝叢書第九編で漸次に死の方に近づきつゝある肺病の患者や之を取巻いた周囲の種々な人物の消沈して行く心的状態が奈何にも痛切に描かれて讀んでひし／＼胸に喰入やうな作である、他に「幼き者」が一編收められてある。

●死の方へ (早稻田文學)

「死の方へ」及び「幼き者」の二編を收む。共に最近文壇有数の佳作で「死の方へ」に於ては此作者の描寫の圓熟と、ナイヒリスチックに傾きつゝある主觀の深さを窺ふべく「幼き者」には運命の數奇に弄ばれて短き一生を父母ならぬ父母の間に終る幼兒の姿を見る。ヒューマンドキユーメントとしてはた立派な藝術品として推奨に値する。

●物言はぬ顔 (貿易新報)

現代文藝叢書第十編として刊行せられたるものにして書題の「物言はぬ顔」をはじめ「薔薇

と巫女」「死」「奇怪な犯罪」都合四篇を收載せり、何れも短篇ながら讀みごたへのある作なり。

●物言はぬ顔 (文章世界)

「物言はぬ顔」「薔薇と巫女」「死」奇怪な犯罪の四編を收めてある。著者は序文の中に、「死」といふ暗い恐ろしい運命をちつと見詰めて藝術の對象としたといふ意味のことを書いてゐる。

●物言はぬ顔 (心の花)

あはれな一人兒を残して死んだ母を叙した前後が最よく突込んで描かれて居る懐れむべき



孤兒出入をしなかつた叔父母が飛んで来て世話を焼く母の氣に入つて居つた車夫何れも口にしなない各々の心の閃がよく現はされて居る則主人公である叔父母の殘忍な人物よくあるタイプながら如何にも面のあたり接してゐるやうでハラ／＼させる「薔薇と巫女」「死」奇怪な犯罪」の三篇を併せて現代文藝叢書の十篇となつたのである。

●哀花熱花 (新潮)

花外氏は其の感情の燃え來れる時は、さながら烈火の如きものがある。當るもの、觸るもの、總べてを焼き盡さずんば止まざるの熱がある。そして、其の感情を以て直ちに物に

觸れ、感じて、其の熱火を紙上に吐露して行く。其所に花外氏の生命と、眞價とがある。此の集は、斯う云ふ特色を有する著者が折りに觸れ、事に應じて發した火花を集めたものである。「哀花熱花」と云ふ表題は、まことに著者の特色を遺憾なく表現したものと云はねばならぬ。集められたところはいづれも皆断片ではあるけれども、其飽くまで人の胸を突かざれば已まぬと云ふ熱と、力と、氣魄とが見える。若い血の躍る青年が讀んで何等か其の生命の琴線に觸れるものがあらう。

●哀花熱花 (讀賣新聞)

本書は著者が其の折り／＼に感じたる小品三

十餘篇を收めたる物にして其の題名は最もよく著者の特色を發揮したるものなり。物に觸れて哀しみ、事に當りて熱する事著者の如きは異數なり。

●哀花熱花 (帝國文學)

藝人や苦力や東京の女や山岳や柳や風濤や女傭や乞食や、あらゆる自然の風物と都會田園の人間とが、例の花外氏の強烈な色調にうつされたのが本書である。一味の詩趣を途上の萬象にとらへて、哀しみ泣き憂へ愛しいつくしむこの詩人の境地には至純な可憐なナチュキリステイクな、そしてロマンテイクな情趣がある。

●哀花熱花 (高知新聞)

「藝人の悲哀」「泥船」「久世山の夏草」外三十二篇を收めてある、花外氏の小品は實に氏獨特のもので其の文想觸るゝところ悉くを焼き又遂に己を焼き悉くさすんば止まざるの慨がある、現代人の熱き哀みを味はんとする者は本書を讀め。

●哀花熱花 (三重日々新聞)

好評噴々たる文藝叢書も既に第十一編に達し今回は兒玉花外氏の哀花熱花を出す藝人の悲哀より始まつて九十九灣の一夜に終る都合三十五編花外氏獨特の文意達筆を味ふ得べし。



●積霧 (二六新報)

「霧積」「東京へ」「近所」の三篇を収めたり、「霧積」は一少年が母と共に信州霧積温泉に赴く途中悪漢に惱まれたる物語にして、「東京へ」は其の少年が東京を出發して東北の知人の許に赴きたる記事なり、共に著者獨特の輕快なる筆を以て叙したり、著者の作品中比較的長篇なれども他の作品よりは稍々調子の異なるもの

●霧積 (大阪毎日新聞)

現代文藝叢書の第十二編にして著者が才氣に富んだ江戸子風の輕快な筆致で物したる霧

積、東京へ、近所の三短篇小説を收む

●霧積 (山形日報)

小山内薫氏の著に係る、題命は霧積なるも外に東京へ、近所の二篇を輯む、共に著者が其折々の感得をば例の流暢なる筆もて平盤的に書き録せるもの、寓意、妙想讀んで自から釋然たるべし。

●霧積 (下野日々新聞)

本編には霧積、東京へ、近所の三ツを収めたり。本叢書は其名に背かず現代的代表的にして趣味の紙面に躍如たるものあるは一度之に觸るゝものゝ首肯する所なり宜なり上梓旬日を出でずして數版を重ねるとや

讀者諸賢と出版者

本叢書を御購讀の上は、何事によらず是に附ての所感を寄せられん事を希望します。

敢て本文の批評には限りません、爾後の著者や、作物の種類などの御希望を記して戴きたいのです。

文體は書簡文でも、言文一致でも、美文でも差支ありません。長短も制限なく葉書でも封書でも御隨意であります。

御寄稿は毎月弊堂發行の「圖書目録」に掲載致します。

宛名は「東京日本橋通四丁目春陽堂出版部」と願ひます。

夫れば本叢書の増版になる時に改良を加へ且又爾後出版の参考に致します。



270  
435



終

